



市民が楽しむ土木空間は継続する—中村良夫先生の言葉 シビルNPO 連携プラットフォーム サポーター (芝浦工業大学土木工学科教授) 岩倉成志

桃の花が咲き誇る古河公方公園を3月末に訪ねました。子供たちが生き物と触れあい、自由に遊べる空間が都会にほんとうに少ないと長い間疑問を感じている私にとって、求めていた公園がまさにそこにありました。世界の文化景観の保護と管理活動の顕著な功績をたたえるユネスコの「メリナ・メルクーリ国際賞」をアジアで初めて受賞した公園です。

この公園、景観工学の大家である中村良夫東京工業大学名誉教授が設計し、今も市民とともに作り続けられています。私はこの数年、土木技術者のレジリエンス能力の研究をしていて、中村良夫先生に幼少から現在までの20時間以上におよぶインタビューにご協力いただきました。数々の教えの中から、市民自治という文脈でほんの一部をご紹介します。

中村先生は青山生まれですが、終戦前年の6才の頃、強制疎開で古河に移られました。都会的な生活とはまるで別世界の生活は十年つづき、谷戸と家の隣の浄善寺が中村少年の遊び場でした。夏は裸足で生活し、鶏が卵を産むのに感動し、近所の子供と魚を釣ったり、虫を捕って、溢れるような生命観の中で楽しく過ごされたそうです。その後、鈴木忠義先生と出会い、景観工学の道を拓き、フランス留学を経て、広島太田川護岸をデザインされた後、偶然にもゆかりのある御所沼の再生を古河市長の小倉さんから依頼されました。耕作地として戦後、沼が埋め立てられ、その後放棄されてしまった湿地の転生に先生は取り組みました。パークマスター制度という市民参加活動をけん引する制度をつくれられ、現在まで30年間も先生は継続的に関わられています。



桃まつりで楽しむ親子連れ



沼に潜む魚や両生類に遭遇

市民参加とはプロジェクトの決定過程で意見を言うというのもあるのですが、専門家がつくった空間に市民が意味づけをするという参加の仕方もあるのですと中村先生はおっしゃいます。それがないとせっかく形を造っても生きてこない、古河公方公園は市民が利用することで新しい意味を発見したり、解釈したり、デザインを創造していく部分があって、市民がそこで自由楽しくやる自主的な基盤となっていくまでも継続するのだそうです。